

桧山 伸吾

品格ある町づくりを目指そう



2007年に1月から日テレ系で「八ケンの品格」という番組が放送されました。

篠原涼子扮する大前春子という派遣社員が、超難関の資格26個を武器に企業が直面する難問を見事に解決してみせる痛快な番組でした。

しかし、多くの資格を持ち、休日出勤、残業はしない、飲み会にも参加しないというのが品格だととられては困るのですが、品格を問う世相が反映していたことは窺えます。

こうした世相を作り出したものの一つに、2005年11月に数学者の藤原正彦さんが著した「国家の品格」が挙げられます。

桧山 伸吾氏

1941年生まれ、1964年法政大学経済学部卒。鉄鋼商社を経て岡山放送入社。記者、解説委員。2001年退社。赤磐まちづくり政策研究会主宰。(財)おかやま環境ネットワーク評議員。

そこでは明治維新以来、欧米の「論理」や「合理性」がもてはやされ、日本古来の「情緒」や「形」を重んじる文化が廃れてきたとして、武士道の精神に戻らなければならないと主張しています。

武士道とは何かについては諸論あるところですが、「恥を知る」ということと理解すれば大いに賛成です。

特に第二次大戦後は「恥を忍んで」なら少しは許せますが、「恥を忘れて」物による豊かさを追い求めてきたようです。

それが環境に与えた影響は甚大でした。

たとえば、高度成長期には都市郊外で大規模な住宅開発がなされ、必要な木材は安いゆえにマレーシアやインドネシアから輸入されました。その結果マレーシアやインドネシアの森林は大きく破壊されました。

そこまでしたに関わらず我が国の山林は守られたかという点に逆ら荒廃し、林業は衰退しました。

また、日本が消費するエビの8割は東南アジアから輸入されていますが、現地ではマングローブの林を切り開いて養殖池を作るため、マングローブの林が破壊され、原住民の生活基盤が奪われただけでなく、多用な生物が生息する貴重な自然が減少しました。

“そんな恥ずかしいことをしてまで豊かになりたいのですか？”と自らに問うこと、これが環境問題などを含めた町づくりの重要なキーワードであると思います。

「武士道」とは、死んだ後にも名が残るから、せいぜい生きていた時から名を惜しんで生活し、子孫のためにも「恥さらし」ならんことは決してしてはならないという教えだと思えます。

